

[研究室だより]

研究室を訪れた人々 2000 年度

本年度は外国から来訪した研究者・文化人のうち、以下の方々に特別講義・報告などをしていただくことができた。われわれの研究室のささやかながらも豊かな国際交流に貢献して下さった皆様にこの場を借りて、改めてお礼を申し上げたい。(沼野充義)

2000 年 11 月 13 日

ケエストウティス・ウルバ博士 Kestutis Urba

「リトアニアの児童文学」(講義は英語,通訳なし)

ウルバ博士は、リトアニア・ヴィリニウス大学助教授、元文学部長。1954 年生まれのまだ中堅世代ながら、『児童文学の経験』(カウナス, 1995), 『アンデルセンの 6 つのメダル』(カウナス, 1998), 『本の時間——中等学校における文学教授の手引き』(カウナス, 1996 および 1998) を初めとする編著書や、多くの論文・書評などの仕事で知られ、リトアニアにおける児童文学研究の第一人者と目されている。今回、児童文学研究のため招待を受け訪日中のところ、沼野が主査をつとめる「多分野交流演習」の特別ゲストとしての形で特別講義をしていただくことができた。この講義は「リエトヴァの会」との共催によるもので、畑中幸子・中部大学教授とリトアニア語に詳しい新進の言語学者、櫻井映子さんには特にお世話になった。

リトアニアはソ連時代にはロシアの影響下に組み込まれながらも、ヨーロッパの西と東のはざままで独自の文化を発展させてきた国であり、この国の文化的感性が言わばもっとも純粋な形で現れる児童文学のあり方は、児童文学を専門としない者にとっても極めて興味深い。ウルバ博士はリトアニアにおける児童文学の発展を 16 世紀から説き起こし、最近リトアニアで出版された美しい絵本の事例まで挙げながら現代に及び、じつに盛りだくさんの内容のレクチャーになった。講義のもとになったテキストの全文(“A Survey of Lithuanian Children’s Literature”)は『リエトヴァの会 会報』第 4 号(2001 年 9 月刊行予定)に掲載される。

2000年12月4日

ヴァレーラ&ナターシャ・チェルカーシン Валера и Наташа Черкашины

「ソ連からロシアへ——帝国文化へのまなざし」(講義とスライド上映,講義はロシア語,通訳・毛利公美)

ヴァレーラとナターシャ・チェルカーシン夫妻は、ロシアの現代美術家。彼らは現在第一線で活躍中のロシア・コンセプチュアリズムのアーティストで、海外でも広く活動を行なっている。今回は東京工芸大学での個展「回顧／ソ連からロシアへ——帝国文化へのまなざし」のため来日中のところ、「多分野交流演習」の特別ゲストとして来ていただくことができた。

レクチャーの内容は、1980年代終りから1990年代はじめのソ連邦崩壊前後の作品を中心に、これまで二人が行なってきたパフォーマンスを紹介するものだった。彼らの作品は当時の体制や社会の状況を強く反映しており、我々のように異なった文化に属する鑑賞者にとって、作品の背後に横たわる政治的・社会的要因や作者の意図を解き明かすこうしたレクチャーは、作品を理解する上で大きな意義がある。また、スライドやビデオを用いて実際の作品を見せ、ソ連ならではの世相を表すエピソードも交えながらの講義は、特にロシアや現代美術を専門としていないものにとっても、たいへんわかりやすく、興味深く聴けるものだったのではないか。紹介の対象が夫妻自身の作品だけにとどまり、ロシア・コンセプチュアリズム芸術の全体像が見えなかったのが残念といえば残念だが、現役のアーティストとじかに接する機会を持つことができ、おおいに刺激になったと思う。

(チェルカーシン夫妻の項の執筆・毛利公美)

2001年2月9日

タチヤーナ・ソコロヴァ=デリューチナ女史 Татьяна Соколова-Делюсина

「ロシア語の俳句についての考察」(講義はロシア語,通訳なし)

タチヤーナ・ソコロワ=デリューチナさんは、ロシアを代表する日本文学研究者・翻訳家の一人。『源氏物語』を初めてロシア語に完訳した偉業や、その他数々の日本古典文学の翻訳で広く知られている。また日本の読者には、『タチヤーナの源氏日記——紫式部と過ごした歳月』(法木綾子訳, TBSブリタニカ, 1996年刊)の邦訳を通じて親しまれている名随筆家でもある。この度、国際交流基金の「サミット記念有力文化人招聘」プログラムにより来日された同氏をわれわれの研究室の外国人研究員

としてお迎えすることになり、この機会に特別講演をお願いした。

ロシア語による「俳句」というジャンルの歴史をたどり、優れた実例を多数挙げながらその現代における隆盛を紹介した講義は、ロシア文学関係者だけでなく、比較文学・詩歌一般に関心を持つ者にとって興味深く貴重な内容のものだった。狭い演習室には普段とは違うかなり多様な聴講者が20名以上詰めかけた。

2001年2月20日

リーナ・ロゾフスカヤさん *Лина Розовская*

セミナー「ロシアと日本のユーモアの比較」(報告は日本語)

リーナ・ロゾフスカヤさんは日本語学専攻、モスクワ大学修士。ヨーロッパ日本研究協会の研究奨励資金を得てわれわれの研究室を受け入れ窓口として来日し、3ヶ月間ユーモアの言語的・比較文化的研究を行った。漫才、アネクドートなどを題材として取り上げたこのセミナーは、その研究成果の一端を披露する中間報告の意味あいを持つものだった。この日はアネクドートについて博士論文を執筆中の今田和美さんに対論者をお願いし、ユーモアの比較文化的検討をする貴重な機会になった。

なお、このセミナーは本来、3回にわたる連続セミナー「ロシア語と日本語——比較文化的・比較文体論的視点」の第1回目として行なわれたものである。残り2回は以下の通り。

第2回 2月27日 報告者 高橋健一郎(ロシア語学専攻、ロシア国立人文大学留学を経て、総合文化研究科博士課程)

«Обращение по имени в русском и японском языках»

第3回 3月6日 報告者 毛利公美(モスクワ大学留学、モスクワのラジオ局〈ヴォイス・オヴ・ロシア〉勤務を経て、人文社会系研究科博士課程)

「ボリス・アクーニンの『白痴のためのお伽話』の文体分析」

この連続セミナーの趣旨は、ロシアから来日中の日本語研究者やモスクワ留学から帰ったばかりのロシア研究の若手を報告者として、現代日本語と現代ロシア語を比較文化的・比較文体論的に扱うということにあり、毎回、日本人だけでなく、ロシアからの留学生に加わってもらい、日露双方の視点からの様々な問題の検討を行なうことができた。

2001年3月12日

ヴィタリー・チェルネツキー博士 Vitaly Chernetsky

「ポストモダニズムとポスト・ソビエト文学(Постмодернизм и постсоветская литература)」(報告はロシア語,通訳なし)

チェルネツキー博士は現代ロシアおよびウクライナ文化・文学の専門家として目覚ましい業績をあげているウクライナ人の若手研究者(オデッサ生まれ,モスクワ大学卒)で,現在米国コロンビア大学の助教授。今回の講義では,同氏が最近執筆を完成させた研究(*Second World Postmodernity: Literary Paradigms of a Cultural Transformation*として出版準備中)に基づいて,ソビエト体制崩壊後のロシア(およびウクライナ)の文化について,世界的なポストモダニズムの文脈に即して理論的に検討した。